

W209a **SPICA の科学運用を支える地上系の検討状況について**

山村一誠、松原英雄、鈴木仁研、山田隆弘 (ISAS/JAXA), SPICA プリプロジェクトチーム

次世代赤外線天文衛星 SPICA においては、その科学的成果を効率的に、しかも高い較正精度で、できるだけ迅速に世に出すことを目指して、科学運用地上系の検討を衛星の開発と並行して進めていくことを考えている。本講演では検討中の地上系の概念設計と課題について述べる。

SPICA 科学運用地上系は、MOC (Mission Operation Center) を中心とする衛星の運用管制系と、SOC (Science Operation Center) を中心とする科学運用をユーザーサポートも含めて用意するシステムから成る。後者には、欧州 (EU 諸国) のユーザーに対して設置される ESA Science Center (ESC)、個々の焦点面観測装置の科学運用計画やキャリブレーションを行う Instrument Control Center (ICC)、そして取得したデータの解析・アーカイブを行う Science Data Center (SDC) から構成される。

また科学運用地上系の早期の策定、特に基礎的レベルの決定を行うことは、装置レベルの地上試験において、実観測運用と全く同じシステムを用いて運用し、同じ形式のデータ取得を行うことを可能にする。これは、科学成果の早期創出に大変有効であることは、2009年に打ち上げられた赤外・サブミリ波天文台ハーシェル成功に裏付けられている。